

江藤 淳

考えるよろこび

考えるよろこび

江藤 淳

昭和49年9月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 株式会社まゆら美研

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社大進堂

© Jun Eto 1974

Printed in Japan

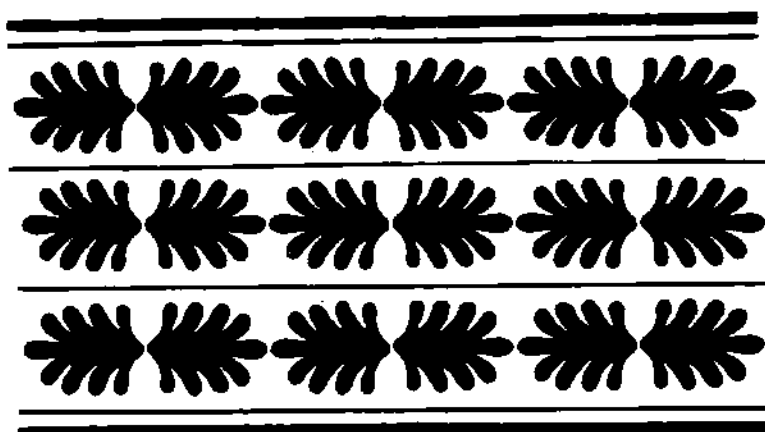
定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

講談社文庫

考えるよろこび

江藤 淳



講談社

まえがき

私は、もともと講演というものが不得手であった。今から十五、六年前、最初に講演というものをしたときには、はじめから終りまで全部原稿用紙に書いていって、それを読んだのである。もっともそのときは、谷川俊太郎が聴いていて、「外国の講演みたいで、悪くなかった」と激励してくれた。欧米では、たしかに、講演のときにはタイプライターで打った原稿を読み上げるからである。

人前で話をすることに馴れたのは、アメリカから帰って来てからである。それは、一つには生活の必要からで、『漱石とその時代』の書き下しをしていたときには、私はほとんど講演の謝礼で生活していた。

集中を妨げられるので、小さい原稿はなるべく書かないことにする。しかし、そうすると収入がなくなつて食べられなくなる。話すことと書くことは別だから、講演を引き受けることにしようといふに決めて、北は北海道から南は九州まで、求められるまでに講演をして生活を支え、書き下しをつづけていた。

その講演が本になるとは、思いもよらなかったが、当節は幸か不幸か録音技術が発達してい

る。録音されているのを速記に起し、その速記に手を入れて出来上ったのが、『考えるよろこび』であった。本になってみると、おどろいたことに、版を重ねた。その上最近は文庫ブームとやらなので、文庫にも入れてやるという有難い仰せである。

どうしようかと、しばし考えたけれども、これに否やといったら、罰があたる。どうぞよろしくお願いいたしますという次第で、出来たのがこの文庫版である。大方の御愛読を願っておく。

昭和甲寅九月初巻

江藤 淳

目次

まえがき

三

考えるよろこび

七

転換期の指導者像

四五

二つのナショナリズム

七七

女と文章

一〇九

英語と私

一三三

大学と近代

一七三

考えるよろこび

I

私の演題は「考えるよろこび」というのでありますけれども、考えるという人間の行為にはいろいろな方向がある。大きく分けますとわれわれはたとえば自然について考えることができる。自然科学というものは、これは自然の構造や性質を考える学問です。たとえばそういう自然についての考察の中から、今日の文明をつくりあげている原子力から月ロケットにいたるまでの、さまざまな技術上の発見というものも生れる。ここでは、そういう人間の外側にあるものについて考えるという心の働きについては、触れないことにいたします。われわれはたしかに自然にとりかこまれて生きている。人間の体も、あるいは人間の心ですら、自然の一部とみなすことができます。科学的なものの考え方によれば、人間の精神というふうなものも医学的・心理学的な分析の対象になります。精神病理学・精神分析学などというものはそういう学問です。人間の肉体も、有機体の部品からでき上っている機械とみなして、心臓移植手術をすることもできます。ですから人間そのものを人間の外側に押し出して、これを一つの計量的実験の対象にすることもできる。これは人間に関する自然科学的な考え方ですが、こういう考え方については、私は今日は

触れないことにいたします。またその資格もないからです。私は、やはり、人間をうちに含んで考えるという方向の考えかたについて、お話ししたいと思います。

たとえば、自然現象について考えているときには、人間はいくらでも客観的になることができる。客観的に観察して、いろいろ数をはかったり、量をはかったりしてその結果の正確を期することができる。ところがそこに自分はいってきますと、人間はどうしても考えのなかに正邪とか美醜とか真偽とか、そういう価値判断を加えざるを得なくなる。このように人間をうちに含んでものを考えようとするとき、わたくしどもはどういう場合に、昂揚を感じるだろうかという、まずなにかを発見したときだろうと思います。これは学問上の研究などでもそうで、どんなに些細なことでも、いままで気が付かずにいたことに気が付いたような場合です。そしてその発見がいろいろとほかの現象とからまりあつて、案外大きなひろがりをもっていることがわかったような場合、そういうときに人間は喜ぶ。何か一種の昂揚を感じるのです。だけれども、どんな人間にとっても一番根本的な問題は自分ですから、自分についてなにかを発見したとき、わたくしどもは目からウロコがおちたような啓示を味います。他人のことはどうでもいいとは申しませんが、結局自分というものをひきうけて、わたくしどもは何十年も生きるのですから、この自分についての発見ということが、ものを考える上で一番根本的な基準になろうかと思うのです。

このことの重要性については、昔の人はやくから気が付いておりました。自分は一体どういうものであり、どこから来てどこに消えて行くのか。自分の正体はいかなるものなのか。そしてその認識を通じて、自分がその一人であるところの人間というものの正体を考えると、それはど

ういうものになるのか。人間にとって生きるということの意味はどういうことだろうか。こういうことについての思索をはじめようとするとき、わたくしどもはいつの間にか自分を一つの基準にして考えはじめています。お隣のだれを基準にして考えるわけにもいかなない。大体わたくしどもは、自分がそれほど追い詰められていないときには、何か他人のことを何やかやとあげつらうことができますけれども、少し深く考えようすると、いつも自分を通じて人間を考えてしまう。自分を通じて社会を考え、歴史を考える。そういう考えの経路をわたくしどもは無意識のうちにとっているのです。したがって、自分についての発見ということが、ものを考えるということの出発点でもあり、ゴールでもあるのではないかと思われれます。

II

さて、ところで古代ギリシャにソポクレスという劇詩人がおりました。紀元前五世紀のアテナイの人です。この人が『オイディプウス』という有名な戯曲を書いています。これは当時アテナイの町で演ぜられて大評判になり、今日でもギリシャ悲劇の最高の達成だとされている、傑作です。現在でも世界各国の学者によって研究されているし、ときには実際に演じられることもあります。このオイディプウス王の物語については、皆さんは「エディポス・コンプレックス」ということばでご存じでしょう。あのフロイトという人が、オイディプウス王の主題を人間の深層心理に隠されている一つの根本的なモチーフと考えて、精神分析学に応用して「エディポス・コ

ンプレックス」という術語を作った。このことからもうかがわれるように、人間にとって根源的な問題をえがいてる劇であります。

どういう筋かといいますと、古代のギリシャにテーバイという都市があつて、この都市をオイディプウスという王様が治めている。ご承知のとおりギリシャは小さな半島ですけれども、そのなかにいくつもの都市国家があつて、そこに今日われわれが、民主主義と呼んでいる制度の一番古いかたちが発生したわけです。しかし、このオイディプウス王の物語は、それよりももっと古いギリシャ人にとつても伝説的な時代の物語です。この王様は非常な名君でありまして、私利私欲は少しもなく、責任をもつて治めている民衆の幸福をいつでも考えている。誠心誠意王としての職責を果しているという、そういうりっぱな人物です。つまり、わたくしどもは普通の道徳的規範からして、オイディプウスの行いになにひとつ文句のつけようがない。ところが、この町にあるとき疫病が発生した。オイディプウスが自分の子供のように愛し、その運命をたいへん案じているテーバイの市民たちがこの疫病のためにばたばたと死んでいく。今日なら伝染病の病原体は何であろうかといつて、たちまち科学的な調査が行われるのでしようけれども、まだギリシャ人にとってさえ伝説の時代であつた大昔のそのまた昔の話でありますから、神様のお告げを聞きに使者を立てました。ギリシャ人という民族は記紀・万葉のころの日本人と同じで、要するに八百万の神様を信じている。いまのキリスト教・ユダヤ教の影響下にある西洋人のように、唯一神を信じているのではなく、オリュンポスの山の上にいる神々を信じていたのです。こういう疫病が起つたようなときに、神託を聞きに行く神様は、デルポイに神殿があるアポロンの神で

す。そこには巫女がしまして、それがこういうわけだから災いがテーバイの町に下ったのであると、そういう御託宣を下してくれる。このデルポイのアポロンの神にうかがいを立てたところが何か穢れがあるというお告げが下る。テーバイの町には穢れがある。その穢れとは、道徳的な穢れである。道徳的な穢れが町を支配しているために疫病が起るのである。そういうお告げが下るのであります。そうすると、これはソポクレスの芝居のよくできているところですけども、悲劇というものは、偶然に左右されてはいけない。主人公がその性格と与えられた状況からして、どうしても必然的にそう動かなければならない運命をたどっていくことによって破局に直面するというのが、悲劇の悲劇たる所以であります。オイディプスは良心的な名君でありますから、王としての責任を果すためにも、何とかして一日も早くこの疫病の根源をつきとめなければならぬ。そのためにはテーバイの町に隠れているところの人倫にもとる穢れの原因をたずねなければならぬ。そういうわけで彼はいろいろと手をつくして疫病の原因を究明しようとす。そのうちにひとりの羊飼いが彼の前にひきたてられてくる。その羊飼いがどうもおかしなことを言っている。それはどうもオイディプス自身に関する話のようなのです。それからだんだんその羊飼いと話しているうちに、オイディプス自身の忘れていた過去がよみがえって来る。

オイディプスはもとと、捨て子であった。これは生れたときに神のお告げがあつて、のろいを受けた子供だから捨てなければいけないといって捨てられる。彼は隣国コリントの王に育てられるのですが、あるとき自分が王の実子ではないという噂を聞かされ、デルポイの神託をあおぐと、「汝はその母と交り、父を殺さん」という恐いお告げを受ける。このために、彼は自分の

宿命を避けようとしてコリントを出奔し、諸国武者修行のようなことをしているうちに、三叉の街道で、ある余儀ない行きがかりから一人の男を殺してしまうのです。そののちに、彼はスピックスの呪いにかかつて苦しめられていたテーバイの人々を、この怪物を殺して救い、テーバイの王に推戴された。劇が進行するにつれて、彼が全く忘れていた彼の正体、つまりオイディプウスという人間の、王オイディプウスの正体というものが彼自身の前にあらわされて来る。ギリシャ劇というのはよくできていまして、主役のほかにコロスというものがあり、これがちょうど、見物人の代表のようになっていく。劇中の人物なのですけれども、主要な人物たちに対して第三者の立場からいろいろ話しかけたり、同情したり、反撥したりするという、そういう役割なのです。が、この『オイディプウス』ではまことに効果的にそのコロスが用いられています。そしてかたずをのんでみている観客の前で、オイディプウスの秘密が次々とたぐり出されて行く。その秘密とはなにかといいますと、オイディプウスが殺した男とは、ほかならぬ彼自身の父ライウス王で、オイディプウスが現に王妃として迎え、日夜生活を共にしているイオカステは、ほかならぬ自分の母親であるといういまわしい事実なのです。つまり呪は成遂せいすいされたのです。そうとは知らぬうちに、彼は結果的には父親を殺し、しかも母親と結婚するという人倫にもとる大罪を犯していた。それはオイディプウス自身の自覚的な努力、王としての良心、指導者としての潔白、個人としての人格の正しさなどによつては償うことのできない罪であつた。彼が全く忘却していた過去から浮びあがってきた彼の正体。それこそが穢れであり、テーバイの町に疫病をもたらしした原因だつたのです。テーバイの中で最も人にうやまわれ愛され、かつ尊敬されていた王自身のその

正体の中に、災いの総ての源があつた。オイディプウスを、この真実に直面するように追いつめて行くのは、彼自身の自分を知りたいという追求欲にほかならない。ものを考えずにはいられないという、ある根源的な衝動にかり立てられて、彼は自ら破局に近づいて行く。この衝動を単に好奇心といっただけでは済まされない。そこにはもちろん、テーバイの町の災いをのぞきたいという公的な責任感もあります。とにかくこのような衝動に迫り立てられて、彼はできることなら一生知らずに済ませてしまいたかつたようなまがましい真実に直面してしまふ。そのとき、一体オイディプウスはどうしたらいいか。彼はまだ王位についているのですから、このテーバイの町を災厄から救うために、何か決断力のある行為をしなければならぬ。けれども、彼のいま発見した自分についての真実はあまりにも残酷なものである。そうすると、オイディプウスはそこで何をするかという、これはまあ舞台でみていても、たいへん感動的な場面でありますけれども、彼は自分で自分の両方の目をえぐり出してしまふ。テーバイの王であつたオイディプウスは、あたかも自分の前に突きつけられたいまわしい真実をみることに耐えないかのように、われとわが目を自分の手でえぐり取ってしまう。もちろんギリシャ悲劇は、大きな仮面をつけ、足駄のようなものをはいて演じるものです。象徴的なしぐさで演じるのですけれども、とにかく自分を罰するために目をえぐり出してしまふのです。

そうして彼は王位を去って行く。そういう穢れた人間が王でありつづけければ、テーバイの町は繁栄することができない。オイディプウスは王としての最後の職責を果すために王位を去らなければいけない。盲目になつたオイディプウスは、杖をつきながら一人の乞食になつてテーバイの

市門をあとにし、放浪の旅に出ていきます。

このオイディプウスの姿というものは、いうまでもなくまことにみじめなものです。しかし、そのみじめな姿が、ことばに表現し得ないようなある深い感動をあたえる。このように筋をお話ただけでは、あまりよくわかりただけなかもしれないかもしれませんが、実際ソポクレスの戯曲を読みますと、この結末の場面でわたくしどもは一種、名状しがたい深い感動を覚えます。それは何かといいますと、どんな残酷なものであれ、勇気をふるって真実に直面することのできる人間を見る感動だろうと思います。知ることのおそろしさと、それに耐える勇氣。オイディプウスの姿は、このふたつを象徴している。彼の姿はまことに悲惨なものでありますけれども、それを見ていると不思議なよろこびをあたえられる。あるいはいわくいいがたい精神の昂揚が感じられる。もはや彼は、肉体の目によつては見る事ができない。しかし、盲目になった王の心の目は、彼がひきうけなければならぬ運命のかたちをはつきりと見つめている。もうごまかしも、いいわけもきかない。これが自分であり、その罪は自分が雄々しく背負つていかなければならない。……このようなオイディプウスの姿には威厳すら感じられる。そういう古代テバイの伝説上の王の物語が、ソポクレスの力強い詩劇になつて上演されるのを見て、アテナイの大きな野外円型劇場を埋めた観客たちは、そこに人間のあるべき姿を見たにちがいないと思います。ものを考える人間の姿。ものをつきつめて知ろうとする人間のおそれ。そしてものを考える人間が究極において持つていなければならない勇氣。人間にとって一番重要なことは、自分を知ることである。結果がどのようなものであつたとしても、それを黙って引き受けて、ぐちを言わずに運命を